

# 消えゆく 日本の美に惜別する

アレックス・カー

聞き手: 佐多保彦 株式会社東機貿 代表取締役社長



Alex Kerr / アレックス・カー

1952年米国生まれ。エール大学日本学部卒業。慶応大学留学後、英国オックスフォード大学で中国学を専攻。東洋の書画骨董、歌舞伎に造詣が深く、著書に『美しき日本の残像』（新潮文芸賞受賞）がある。京都府亀岡市在住。

佐多：カーさんは四国の祖谷溪で、古い茅葺きの日本家屋に暮らしておられたそうですね。祖谷は日本文化を愛してこられたカーさんの原点ともいえる場所なのでしょう。

カー：僕は12歳で初めて来日したときから日本が好きで、アメリカに帰ってからも日本の勉強をすることばかり考えていました。エール大学2年生の夏に、2カ月間、日本中をヒッチハイクして回り、最後に行ったのが祖谷でした。金毘羅参りで出会った友人が、アレックスが絶対に気に入るところに連れて行ってあげる、と誘ってくれました。まだ舗装されていない山道をバイクに乗って、ちょうど雨の中、だんだん山奥に入っていくと、じわじわと白い霧が湧き上がってきて、古い屋根がボツン、ボツンと見える。……それは仙人の世界かと思いましたね。

よく日本通の外国人がお茶や日本建築が好きといいますが、僕はそれ以前のもの、霧とか山とか岩、石、そういったものを愛します。神道で山や川に神様が宿っているというように、祖谷には、そのような目に見えない力を感じました。祖谷溪は平家の落人が隠れ住んだという日本の秘境です。26年前の当時は、まだまだ日本の田舎が美しかったというだけではない、僕の憧れの東洋の、神秘的な自然があったと思います。

ところがいまは観光地になってしまって、もう地獄の風景です。有名な葛橋のすぐ傍に無造作な鉄とコンクリートの橋、見苦しい看板、無粋な箱型の建物、お粗末でみっともないものが平気で作られています。僕はそれを見ると悲しくて、祖谷に行くのが辛くなってしまいます。

佐多：日本人には、美しい日本という固定イメージがあって、実態は見えていない、あるいは見たくない、と。

カー：そうですね。しかし皆どこかで、不満をもち、これじゃつまらないと、わかっているのです。だからこそ年間2000万人もの人が海外旅行に行き、京都や奈良には修学旅行以外は行かないのです。大人の行ける文化的な都市がなくなってきているからです。

先日僕は上野の東京都美術館に、お華の家元

の展覧会を見に行ってきました。何百人という先生の作品がずらっと並んでいました。が、これがなんと、恐ろしい。材料の半分以上が花ではないんですよ。ビニール、ワイヤー、段ボール、それらを切ったり貼ったり、花を千切ったり、ねじ曲げたり、スパンコールで飾ったり……。ちゃちでグロテスクなモンスターです。自然の花に対する尊敬もなにもない、そんな怪物をつくるような発想が、要するに、自然破壊の極まる粗末な都会に住んでいる、家元の発想。お華の先生まで、花がわからなくなっているのです。

佐多：日本はもともと貧しい国だったのです。ポール・クローデルという明治時代の駐日フランス大使が著書に書いているように、貧しいけれどもノーブルであった。それが精神的な支えであった。しかし近代化を急ぐあまり、ゆとりをなくし、文化を等閑にしてきました。

カー：僕が若いころから日本について教えられてきたことはこういうことでした。東洋では日本はいち早く西洋の技術と自国の伝統をうまく調和させて新しい国家をつくった成功例であると。第二次世界大戦で大きな間違いをおかしたけれども、敗戦後はまた新たにスタートし、経済的に発展し豊かになったと。

しかしどうでしょうか。60年代になり、各家庭にテレビや冷蔵庫が入り、なんとか貧しさから脱出したころから、社会の形ができてしまいました。この辺でいいや、日本式でやりましょうとばかりに勉強をやめ、あぐらをかいた結果、中途半端な近代化に踏みとどまってしまって、そこから方向を変えられないのが今の日本ではないでしょうか。60年代、70年代初頭の工業化社会のまま、どんどん変わりゆく世界に対応できなくなっています。

周囲をよく見て思いなおしてみれば、悲惨な戦争を引き起こした戦前の軍国主義とまったく同根の文化的社会的な原因で、いま日本はもう一度止めどもなく進んでしまっています。美しかった山も川も削りとられ、コンクリートばかりになっています。長良川の河口堰も、諫早湾の干拓工事も、誰も喜ばないようなことなのに止められない。杉植林は大失敗だと誰もが知っているのに廃められない。オンスイッチはあるけ

れどもオフスイッチのない戦車が進んでいくように。これは日本の悲劇です。

佐多：いまの日本の状況は、西洋の技術を自国文化によって消化できずに、いわば巨大な消化不良をおこしている状態だと思いますが、後続の東南アジアや中国はどうでしょう。

カー：東南アジアや中国は違うでしょうね。確かに近代化によって最初の10年や20年はひどい自然破壊が起こるでしょう。しかし一方で現に自然保護運動も、日本よりはるかに盛んです。

中国に昔からある道教の「易」の思想では、宇宙は絶えず変わる、雲のように、波のように、霧のように動いている、それが宇宙の「気」であり、変わることが「易」、動いているものにどう合わせるかが「道」なんです。今日あるものも明日はない。根底にそういう思想がありますから、華僑の人たちは変化が速い。世界が変わると、彼らの社会も変わります。いま彼らは本当の近代化に踏み切ろうとしています。

もっと言いますと、日本は「平和」の好きな国です。つまり波風のたたない、静かなシーンとした平穏無事な状態です。江戸時代、鎖国政策下の武家社会のように、時間が止まったなかでつくられた「平和」を好む傾向がありますね。新しいものをとり入れないで、十年一日、中途半端な快適さにあぐらをかく。日本芸術の一番深いところにある永遠の静けさみたいなものには、皆、惹かれます。日本文化の強さでもあり、素晴らしい精神性です。しかし、これが諸刃の剣なんですよね。

それと、清貧が美しいという、シンプルで何でもないものこそが美德であるという、そういうものが、日本文化から蒸発してしまいましたね。祖谷の秋は、薄の白い穂に夕陽が輝いて、それはそれは美しい。そんな何でもないものを大事にするのが本物の文化だと思います。モニメントや多目的ホールが文化ではありません。



奥祖谷二重橋



武家屋敷「旧喜多家」

佐多：日本の社会では、ある一定のルートを外れると、非常に苦しまなければなりません。そのために人間がいきいきと生きられないのです。そんな日本にはもう救いはないのでしょうか。

カー：もしあるとしたら、人間にあるでしょうね。例えば歌舞伎の坂東玉三郎さんです。彼の魅力を一言でいったら、それはピュアということです。200年に一人というほどの、生まれながらの天才であるだけでなく、芸術に対して命の全てを捧げ尽くしています。彼には芸術以外何もありません。ふっとした手の動き一つ、ちょっとした言葉一つ、シンプルで何でも無いもの、見ていなければ分からないくらい、静かなちょっとしたものをすごく大事にしています。それが全てなんです。何でも無いように見えて、実は天と地の違いがあるんです。そんな静かな、地味で、密やかなものが分からなくなり、消えてしまうと、日本舞踊や歌舞伎を飾りたてて、グロテスクになる。派手に動く、天に飛ぶ、冗談にする。……ばかばかしくなってくる。玉三郎さんはピュアだから、俗世間とはちょっと離れた道を歩きました。彼の話は実にエッセンシャルでコンサイス、つまり俳句です。直感的で精神性に満ちたことを短い美しい言葉で、ピシッと言うので、いつも驚かされます。前置きがあって説明があって、結論に行くというような人ではありません。それはとても日本的なことです。

40代以上の人達のなかに、古き良き時代の本物を見たことのある人がいます。本物の良さが分かり、同時に現状もよく知って、自分なりに消化して、そして何かを残したい、世界に影響を与えたいと、一生懸命な人達、彼らのなかに望みの網があります。日本の山や川、日本の田舎や街は駄目になりました。けれども、まだ人間の中に美しい日本があると思います。

佐多：玉三郎さんほど洗練されると、観客がついていけなくなる？

カー：そんなことはありません。切符が買えないほど、日本人は文化に飢えています。本当に美しいものに飢えているのです。

先程お話しした、生け花の展覧会場でのことです。グロテスクな花の群れに失望した僕が、たまたま見に来ていた外国人の女性に聞いてみました。すると日本的で素晴らしいということです。僕はこれのどこが日本的なんだ、ビニールやプラスチックのどこがいいんだと怒ったんです。すると、その隣にいたごく普通の日本人のおばさんが、そうなのよ、自然破壊なのよ、と感激して言うんですね。彼女は、お華の先生たちの展覧会だから素晴らしいに違いないという先入観に支配されていて、自分に自信がないのです。日本的だと言われても、心のなかではちっとも嬉しくなかった、嫌だったんですね。

佐多：そうですね。しかし20年間日本で暮らしてこられたカーさんも、この夏から、タイに引っ越されるということですか？

カー：20年前には、東洋が好きで僕としては、日本に来るしかなかったのです。中国やタイにはなかなか行けませんでした。東西交流といえば西洋と日本との交流でした。しかし今は違います。東洋の選択肢が増えて、その結果日本は

それらのなかのひとつになったのです。健康的なことと言えるでしょう。けれども日本文化の現状では、戦車の前に素手で立ちあはだかのようなものです。

一方バンコックは東南アジアの首都的な存在になり、国際社会が美しく花開いています。そこで僕は、20年間日本で学んできたものをタイで生かしたいと考えています。つまり、僕は京都亀岡の宗教団体・大本伝統芸術学苑で日本の伝統芸術セミナーのお手伝いをしてきました。外国人がお茶と合気道、書、仕舞い、この4つを日本人の先生から直接学びます。日本文化は無口で、非常に簡素な俳句的な言葉でしか教えません。動きや体で感じるものなんですね。1カ月間、朝から晩まで伝統に徹することによって、家元制度やしきたりのむこうにある、日本文化の真髓が見えてきます。これが素晴らしい影響を人に与えるのです。

タイの舞踏、お華や接待の作法、伝統的な健康法などの底には深い仏教的精神性が流れています。しかしそれを教えるシステムがないのです。いま危機的状況にあるタイのひいては東洋の伝統文化を残すために貢献したい、それが僕の新しい仕事と思っています。



写真：梅村貴子

# 森林衰退と 大気汚染(酸性雨・霧)

中根 周歩



中根 周歩 / なかね・かねゆき

1947年、横浜市生まれ。78年、大阪市立大学大学院博士課程中退。同年、広島大学総合科学部助手。90年、同学部教授。現在に至る。日本生態学会誌編集委員長、全国委員、自然保護協会評議員、環境庁酸性雨検討会委員などを歴任。専攻は環境生態学、森林生態学。

先進諸国で大気汚染が深刻化した1960年代から70年代にかけて、わが国でも大都市や工業地域内で、喘息などの呼吸器障害が多発し、また光化学オキシダントによって、校庭で運動していた児童がめまいで倒れるなどの人体への被害が顕在化した。一方、当時大気汚染やこれに起因する酸性雨や酸性霧による自然生態系(森林)への影響は一部の工業地帯や大都市、またその周辺で顕著に見られたが、そこに限定されていた。二酸化硫黄ガスが付近一帯の山々の草木を一本残らず枯らした足尾銅山の例、四日市重化学コンビナートから排出する大気汚染によって、周辺のスギ・ヒノキ林の生育が極端に落ち込んだ例、大都市の街路樹が軒並みに枯れていった例などである。

その後、1970年代後半から80年代にかけて、わが国では脱硫装置の設置や自動車の排ガス規制などの努力によって、一時的には二酸化硫黄を主とする大気汚染は軽減された。しかし、増大し続ける化石燃料の大量消費によって、主に二酸化窒素を溶かし込んだ雨・霧の酸性度は増し、その降雨範囲は広がり、大気汚染は慢性化していった。最近、アトピー性皮膚炎、花粉アレルギーとこれら慢性化した大気汚染との因果関係を指摘する科学者の見解も多い。また、ディーゼルの排ガス中にはベンズピレンなどの発ガン性物質が多々含まれているという事実などは人体への大気汚染の影響が今後かなり深刻化する可能性を示唆していよう。

さて、人体への影響に劣らず、この数年わが国においても、欧州や北米と同様に大気汚染、酸性雨・霧によると思われる森林被害が全国各地から報告されるに至っている。例えば、北海道苫小牧工業団地周辺のストローボマツの枯死・衰弱、関東平野に面した山々(丹沢山、赤城山、奥日光、筑波山など)での森林衰退、中部山岳地帯の乗鞍岳でのシラビソ・オオシラビソの枯死、奈良大台ヶ原のトウヒ林や吉野山のヤマザクラの衰退、紀州田辺や三重県の梅林の衰弱、山陰地方や瀬戸内海沿岸部の松枯れやヤマザクラの衰弱・枯死、北陸沿岸部から山陰地域にかけてのナラ林の衰退、中国山地臥竜山のブナ林、福岡県宝満山のモミの枯死、関東・大阪平野の鎮守の森のスギの枯死など(図1)、「森林の会」の報告でも全国54か所に及ぶという。大気中に蔓延し始めた硫酸酸化物や窒素酸化物ガスや、これが雨、霧や露に溶けた酸性雨・霧・露、風塵に付着

した酸性浮遊物質・降下物質、さらにこれら一次汚染物質が大気中で強い太陽光によって光化学的に変化し生成する、より毒性の強いオキシダントなどが過去二十数年にわたって、自然の生態系および動植物を目に見えない形でじわじわと蝕み、それがやがて顕著な危害となって現れてきたと思われる。しかし、大気汚染、酸性雨・霧などによる森林の枯死、衰退のメカニズムは決して一様ではなく、極めて複雑であると考えられる。

この両者の複雑と思われる因果関係をわかりやすく概略的に示したのが、図2である。大気汚染による樹木への影響は、汚染物質の形態としては、(1)ガス、(2)雨・霧・露(湿性)、(3)浮遊・降下物(乾性)の3通り、影響部位としては、(1)生産をつかさどる葉、(2)水分や栄養塩類を吸収する根系の2通りが主に考えられる。実際の野外では、どの形態が主原因で、どの部位に主にダメージを与えているかは、その場合ばあいによって異なるが、影響の大小はあるけど、すべての汚染形態がすべての樹木の部位にマイナスの影響を及ぼしていると考えらるべきであろう。

以上は大気汚染、また酸性雨・霧などによる森林樹木への影響メカニズムの一般的説明であるが、現在のわが国の大気汚染による森林衰退の特徴、特性を考える上で、さらに以下の3点に注目する



図1: 全国的主要な森林衰退、樹木被害が報告されている地域と、被害を受けている主な樹種(中根 1996)

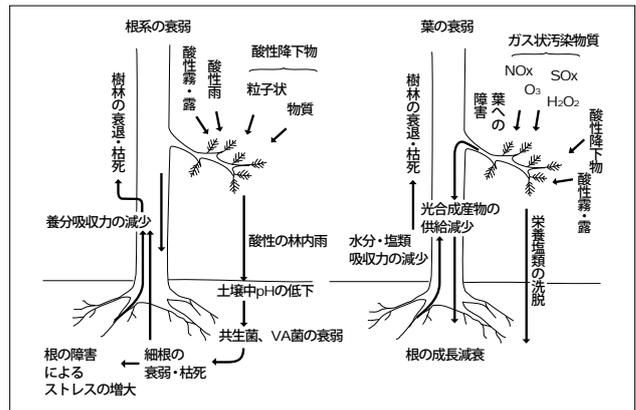


図2: 大気汚染、酸性雨・霧・露などによる樹木被害のメカニズムの概略図(中根 1996)

必要があろう。

- (a) 二次大気汚染物質を含む、複合汚染物質の複合影響
- (b) (a) の大気汚染物質の長期にわたる影響
- (c) 中国大陸などからの越境汚染の影響、である。

まず、(a) についてであるが、二酸化硫黄や二酸化窒素などの一次汚染物質の影響については、人為的にその汚染物質を植物に吹き付けて、その影響を見るという「暴露実験」によって、短期的影響の評価はある程度なされている。しかし、一次汚染物質が大気中に滞留、移送している間に光化学的な変化を受け生成するオゾン、過酸化水素、過酸化アセチル窒素などの有機酸化物など、光化学オキシダントと総称されている二次汚染物質の影響評価に関するデータは極めて少ない。しかも、これら二次汚染物質は、二酸化窒素を主な生成起因とし、これらの影響は一次汚染物質よりはるかに強いとの指摘がある。国立環境研究所の畠山史郎氏は、群馬県赤城山や奥日光・前白根山の関東平野に面した斜面で、100ppbを越えるオゾン濃度を観測している。この濃度は短期的にも植生被害をもたらすもので、これら斜面では、シラカンバや針葉樹のシラビソ・オオシラビソの集団枯死が広がっている。また、高橋啓二千葉大学名誉教授は、関東甲信越地方や関西・瀬戸内地方の数多くの鎮守の森のスギ被害を調査したところ、被害程度が大きい所ほど、大気中のオキシダント濃度が高い傾向があることを突き止めている。また、気孔から容易に葉細胞に浸入しうる過酸化水素は強力な光合成阻害物質である。さらに、問題は一次汚染物質と二次汚染物質が実際の大气中では混在しており、この複合汚染物質の影響は、単なる1たす1は2といった足し算ではなく、5~6倍の相乗効果をもたらすということである。それぞれの汚染物質がたとえ「大気環境基準」以下であっても、これらの相乗効果の影響を評価するための暴露実験は現在ほとんどなされていない。また、汚染物質が大気中の風塵と混合し、これが風で運ばれ、高さとも大な表面積をもつ樹木葉に多量付着する、いわゆる酸性降下物質のダメージは想像以上と思われる。静岡県立沼津西高校の遠藤稔教諭は、ディーゼルの排ガス中の煤<sup>すす</sup>を含む降下物がマツの気孔を封鎖し、これが気孔の光合成や蒸散の機能を喪失させ、マツの枯死の原因になっていると指摘している。また、中根は晴天が

続き、付着蓄積したマツの葉上の酸性降下物質に酸性霧・露が付着した場合、pH2を切ることも珍しくないと報告している。

森林被害を考える上で大切なのは、(b) の大気汚染物質の長期的影響である。それは樹木の寿命が一般的に数百年というオーダーだから、大気汚染物質を少なくとも過去数十年にわたって浴びてきており、仮にその影響は一時的には微量であっても積算されるからである。この長期の影響の評価は現在の暴露実験の手法、期間では困難である。長期にわたる影響によって衰弱した樹木に、台風や干ばつなどの気象災害、または開発などの人為的災害が加えられた場合、一気に枯死に進むことも考えられる。

最近問題視されているのは、(c) の越境汚染の影響である。経済成長のめざましい中国、韓国からの大気汚染物質の飛来量は国内の発生量と比較するほどとの指摘がなされ、日本海に面する地域で、東京、大阪を大きく上回る二酸化硫黄濃度が観測されている。新潟県から島根県にいたる日本海に面する山々のナラ林で、1990年ごろから目立ち始めた枯れが急速に拡大している。関西総合環境センターの小川真所長は、ナラ林の集団枯死は、積雪の多い日本海側斜面に集中していること、そこではナラの根に寄生し、ナラに栄養分を補給している菌根菌のキノコが消滅し、さらにナラの細根が枯死、衰弱していることを報告している。雪が大陸からの汚染物質を運び、これを濃縮するため、強い酸性の融雪水が土壌や根を傷つけた結果であると指摘している。

以上のように、「酸性雨」による森林被害は、雨による被害というよりも、いろいろな汚染物質が、多様な形態で長期にわたり影響を及ぼし、森林植生、土壌の特性さらに気象災害などもからんで表面化してきていると考えるべきであろう。

これら大気汚染の発生源は主に化石燃料の大量消費で、これに依存しているエネルギー・社会システムが背景にある。太陽光、水力、風力、地熱発電など環境にやさしいエネルギーを基本としたシステムへの移行なしには森林衰退、さらに人体への影響をくいとめることは容易ではない。

# 集中治療と インフォームドコンセント

第24回日本集中治療学会パネル「ここに問題はないか」より（抜粋）

河合 隼雄

医療の現場では人間関係が大事

本日のテーマが「集中治療の科学と非科学」というので、感激しているんですが、私は非科学のほうに属しております。だんだん医学の分野でも、非科学を考えなければならなくなったのではないかというのが私の考えです。つまり科学ということの考え方が変わりつつあるのではないか、変えていかねばならないのではないか、あるいは、医学と医療とをもう少し明確に分けて考えた方がいいのではないかと考えています。といいますのは特に現代の日本では、医学が西洋近代のサイエンスの方法論をそのまま踏襲しているわけです。簡単にいいますと、現象を客観的に観察することによって、その現象のなかに生ずる因果関係を見つけ出す、法則を見いだす、私と現象とは全く関係ありませんので、法則は普遍性を持つ。この方法論は西洋近代に生まれたものですが、これは非常にテクノロジーに結びつきやすい。その方法論で、日本の医学もどんどん発展して、すごい成果を上げてきたわけです。多くの病気を克服し、寿命も伸びてきた。

しかし、人間全体ということを見ると、どうもそういうアプローチだけではうまくいかないところがあるというのが、私の考えです。自然科学的な関係というのは人間関係をもちませんが、実際の医療の場合は、人間関係がすごく大事なことがあるのではないかと。医者と患者、看護婦さんと患者さんとの関係はどんな関係か？あるいは患者と家族の関係はどんな関係だったか？というものです。人間関係のからみあいの中で、ひとりの人間が病んでいる。人間関係の網の目がいろいろあるからこそ助かってきたという人がいるんですね。自分は誰にも関係ないからこの辺で死のうと思っている人と、何とか生きたいと思っている人は、やはり違ってくるんじゃないか。ところが人間関係を考え出しますと論文に書けないことが多いんです。理由のわからないことが起こる。

集中治療室では変性意識が起りやすい

さて、次に集中治療室では死ぬか生きるかという状況になると、そこでの人間の意識は通常とは違ってきます。変性意識という問題ですね。これはいままでもあまり学問の対象になりません

でした。あまりに日常的な常識を超えることがあり過ぎるからです。変性意識状態という一番よく体験されるのが夢です。夢の中では空を飛んだり、いつの間にか過去になったりします。最近アメリカではドラッグ体験をする人が増えてきて、今ここで見ている現実というのは、意識によって相当に違うものになるということがわかってきた。意識状態が変われば現実の見方も変わるんだと。また臨死体験ということが多く報告されるようになりましたが、つまり、死に近い状態の意識というのは非常に不思議なことが起こっているわけです。これも私は人間関係だと思えます。

ある方が集中治療室ですごい妄想体験をした。この方はれっきとした学者です。手術が終わって麻酔が覚めてきたとき、自分は何かわからないけれども悪いやつに捕まえられて拘禁されているという妄想を持ったんですね。そう思い出すと皆そんなふうに見えてくる。この束縛からいかに脱出するか、と考えているところへ奥さんが見舞いに来られた。安心して話しているうちに現実感覚が戻ってくる。ところが面会時間が終わると、また妄想が出てくる。そんな馬鹿な、と思われるかも知れませんが、やっぱり急に発作が起こったりして、今までの世界と全く隔絶されたところに来ているときは、今までの記憶も消えているわけです。非常に不思議なところにほうり込まれている、ものすごい不安でたまらないということを人に伝える一番いい方法というのは、「俺は誰だかわけのわからないやつに捕まえられている」というのが心の状況にピッタリですね。

私は昔話の研究をしております。昔話といいますと非常に荒唐無稽と思われるかも知れませんが、例えばかちかち山で、騙されてタヌキ汁の代わりにV/A汁を啜ったなんてのを読みますと、そんな残酷な話があるかと思われます。しかしその辺りを見ますと、年寄りの甘い汁を吸っている話によくあるんです（笑）。ですから、状況というものをうまく拡大して示すのに、お話というのはピッタリなんですね。集中治療室に入ったのはタヌキに化かされて、とは現代ではないんですが、CIAに誘拐されたというのは、これは現実に起こりうるわけです。我々は妄想を持った人とお会いして、妄想的な心は

河合隼雄 / かわい・はやお

1928年、兵庫県生まれ。京都大学理学部卒業。臨床心理学者。スイスのユング研究所留学後、日本にユング派心理学を確立。現在、国際日本文化センター所長。京都大学名誉教授。

いったい何を訴えようとしているのかということを探ろうとしています。

集中治療室のいろんな幻想とか妄想というのは非常に意味のあるものを教えている。だから、何を訴えたがっているのか、これからが面白い。集中治療室は面会時間がありますね。しかし奥さんが帰ろうとすると妄想が起こる。奥さんが、どうしようと思って婦長さんに相談されると、婦長さんはそういう心得のある方で、「これは主治医には申し上げませんが、そっとおつてあげてください」と言われた。「こういうことはわりとよくあるんです。そういう時は信頼される家族の方がおることで解決します。だから黙っておきますから、おつて下さい」と。それで大分長い間おられて、それで帰ろうとする、また「どうして脱出するか」となってくる。それで明日何時に来ますと紙に書いて署名してくれと言われて、それを渡して、その方、ずっとその紙を握って待っておられたそうです。また次に行くと、だんだん回復して「俺は何であるかと思ったか」と。「しかしお前があの時ずっと晩遅くまでおつてくれて、あれをやってくれんなら、自分はひょっとして窓ガラスを破るくらいのことにはしたろう」。ここですごいのは婦長さんの判断力。おそらく婦長さんは、その方が妄想を持ったということは主治医に報告しておられないんじゃないか。言っても、馬鹿なこと言うなと（笑）。

私の申し上げたいことは、医療が関係してくると、特に集中治療室では、変性意識が起りやすくて、不思議なことがいっぱいあるということです。もっと不思議なこともある。どう考えても科学的に説明できないこと、つまり非科学的に説明できることが起こってくる。よく報告されるのは臨死体験です。ひとつ確実に思うのは、医学的にはほとんど死んだと思われる方が、案外よく聞いておられる。死んだと思って、遺産の分配の喧嘩をしているのを聞いて、もう一回生きて、非常に辛かった、と（笑）。私は変性意識というものをよく見ていくと、非常に

不思議なことが起こっていると思います。集中治療室の変性意識という問題を、皆さん念頭に置いていただけたらと思います。

#### 母性的関係と父性的関係

次にインフォームドコンセントの話になりますが、その前の人間関係というのを見てみますと、ものすごく割り切った言い方ですが、私の表現を使うと、父性的な関係と母性的な関係というのは異なると思います。私は『母性社会日本の病理』という本を書きましたが、先進国の中で日本人の間人関係というのはまだまだ母性的なもの強い。

母性的とはどういうことかといいますと、かつては一体であった母と子の関係です。だから母性関係の根本というのは言葉がないんですね。友人なんかでも、俺とお前の仲やないか、なんて言うのは、あんまりツブツブ言わなくても分かってくれる、というのは母性的な関係ですね。医療チームで仕事をしておられて、いちいち言わなくても全部でワツと動いていることがありませぬ。指示を出さなくても通じるという一体感というのはチームの中にも起こります。これはスポーツマンでも一流の人はみんな体験していると思います。それに対して父性的な関係というのは、それをはっきり言語によって合理的に、ちゃんと説明して、これはこういうわけだからこうします、と。この父親的な論理というものを非常にはっきりと確立したのがヨーロッパ近代ですね。そういう父親的な関係による信頼関係というものは、いったん約束したら破ってはならない。契約というものは絶対です。嘘はものすごい罪悪です。ところが日本ではそこらじゅうで皆ウソ、ウソ、と(笑)。日本はいまだに母性的なものを保持しながら、アジアの国のなかでは、そうとう父性的なものを入れこんでいる国だと思えます。

ところが集中治療室という生死のかかわるところでのインフォームドコンセントの問題が出ると、二人がどういうベースでものを言っているか、ものすごい揺れる。母性的信頼関係の場合は言葉で説明する必要はないわけですね。「俺にまかせておけ」、「ウン」と言うたらいいんです。一方父性的信頼関係で、私のいうことに間違いがないというのは、専門的な知識において、合

理性において、俺は全部知っているからやりなさい、と。そして日本の傾向として母性的であったのが、どんどん父性的なほうへ動きつつあります。どちらがいいかということは、私にはほとんど言えないくらい、一長一短だと思います。母性的なほうは、ウンと言って任すんですから、任された方がいい。しかしそこに誤魔化しがあっても許される。そこを問題にしたとすると、父性的にどんどん話し合うほうがいいように思いますが、これも大変なんです。なぜかという、人間の存在そのものが、何も合理的にできているわけではありません。仕方のないところがあるんですね。そういう非常に合理的なものも非合理的なものもいっぱい背負っている人間存在の中で、合理的にできることは強いんです。なるべくなら、それに頼りたい。頼りたいけれども、それが全てだと思ったら、どうも難しい。アメリカ人の友人が言っておりましたが、皆が合理性を追求してくると、医者発想が、自分をディフェンスするのを第一にする。患者さんとの関係で一番いい方法を選ぶというのでなしに、攻撃されても大丈夫かどうか、大事になってくるんですね。これでは自分の職業が駄目になる、と。どうしてもなくてもいいというものがどんどん増えてくると、人生において本当に大事なことを失っていくんじゃないか、と書いておりました。

日本の医療としてはこれをどういうふうに持っていくのかということは、難しい問題ではないかと思っております。アメリカならアメリカを、スウェーデンならスウェーデンをモデルにしていこうとはどうしても簡単に言えない。我々ほどのあたりを狙っていくのかということは、これからすごい議論になるのではないかと思います。

#### 臍に落ちる説明

それから問題になりますのは、集中治療室では生死の分かれ目みたいなのが来ている。そうしますと、本人にしても家族にしても、非常に理不尽なことを受け入れなければならない。理不尽なことに対する怒りというものもあるんですね。ここでインフォームドコンセントというのは、父性原理でやっていますから、どっかで納得がいけないということになります。「頭ではわ

かっているけれど、臍に落ちんわ」ということがありますね。インフォームドコンセントの時に臍に落ちるようなことを言って欲しいと思っている人がいる。お医者さんとしては、我々は知的で合理的な問題を扱っているのだから、臍に落ちるか落ちないかは、あんたの人生の問題だと突き放していい。が、時にはその人が臍に落ちるような説明をしてあげること大事になってきます。お医者さんというのはヨーロッパ近代の考え方をものすごく先鋭にして、スパッとやろうとしているわけで、急に患者さんとの関係の中で、「どうも死ぬの臍におちませぬ」とまるっきり違うことを言われても、その2つのことをいっぺんにやれというのは、神様でもできないのではないかなと思うわけです。

それで、だんだん医療はチームで行われることが大事になってくるんじゃないかと私は思います。分業でやる。身体的なことが入ってきますから、最高の責任者はお医者さんがなれるのがいいと思いますが、そこに看護婦さんもおられるし看護助手も、我々のような臨床心理士もおるといように、いろんな人がチームに入ってそこで一緒にやっていく。お医者さんの言葉をよく聞いていて、患者さんに対して臍に落ちるようなことを言う、分かってもらう、その言葉をその時にうまく言える人というのは、いないんじゃないでしょうか。医学的な説明を聞いても全然分らないが、ただこういうことなんですよと言われると、ふっと分かったような気になる、上手なたとえ話、そういうものがあるわけです。例えば、てんかんの人で、抗てんかん剤を飲むのを嫌がる人がいるんです。その時に、薬を飲んでいたらてんかんの発作は起こらないで生きていけるんだから、これは近視の人が眼鏡をかけているのと一緒だと言うんです。眼鏡をかけて普通に見えるって言っているのを、「変わっているなあ、眼鏡かけてメガネ人や」なんて皆言わない。普通に暮らしているやないか。だからてんかんの薬を飲んで発作なしに普通に暮らしている人は普通の人なんだ、と。そういうふうに言われてパッとわかる人がいる。そういう、皆が臍に落ちやすいたとえ話、相手によってものの言い方を変えられるというのも大事じゃないかと思えます。

# 感染と人間 (7)

中田 光

忌まわしいポケットベルの音

私はPHSが嫌いだ。道路や電車の中でところかまわず、プライバシーをさらけ出している若い人たちにも違和感を抱くが、それよりもあのベルの音がわけもなく不安な気分をかきたてるからだ。かく言う自分も昭和60年から63年にかけて、勤めていた病院の医局の勤めでポケットベルを携帯していた。勤務時間外に鳴るポケットベルは大抵患者の急変か、不調を報せるナースステーションからの発信で、鳴るたびにどきどきしながら近くの公衆電話に駆け寄ったものだ。その頃は肺癌や慢性呼吸不全の患者を10人近く受け持っていた。助からないとわかっていても、患者が苦しうに息をしていると、ついつい挿管したり気管切開したりで、人工呼吸器を装着し、延命を強いて泥沼に入っていくことが多かったように思う。何台もの人工呼吸器のアラーム音のために病室の間を飛び回っていた。

昭和62年の年が明けて間もない頃だった。話すのも歩き始めるのも遅くて心配していた長男が、ようやく片言を話すようになって、私の遅い帰宅を玄関にちょこんと座って待つようになった。その日も、彼は遅い昼寝をして夜遅くまで水色のガウンを着て待っていた。ところが、帰宅して抱っこをせがむ子を抱き上げたその瞬間、あの忌まわしいポケットベルが鳴った。病棟に電話すると、その日入院した患者が急変し、チアノーゼがみられるという。すぐに行くから、その間当直の先生にお願いしてなんとか保たせていてくださいと言くと、帰宅したそのままの格好で引き返すことになった。長男はわけが分からず、ただ泣き叫んだ。寒い玄関でずっと待っていた小さな心を使うとこのまま医者辞めてしまいたいという衝動に駆られた。また、そういう自分は医者に向きなのではないかとも思った。

急速に進んだ呼吸困難

通りに出てタクシーを止めるために挙げた手に、さっき抱き上げた子の感触が残っていた。しかし、乗り込むと不思議とつらい気持ちが消えて、これからやらなければならぬ処置の段取りに没頭した。患者はMさんという72歳の男性で、生まれつき丈夫な人だったが、暮れから激しい

咳と血痰のために外来に通院していた。血痰といっても、ごく薄いオレンジ色で、さらさらと水のような透明さがあった。微熱はあるが、咳、痰、息切れ以外は全身症状はなく、ただ咳のために食欲がなく、眠れないのかだんだん衰弱していくのがはた目にもよくわかった。痰の細菌検査では病原性のない常在菌が検出されるだけで、何度繰り返しても明らかな肺炎の証拠がなかった。しかし、細胞診では沢山の気管支の細胞が剥け落ちてきているのが観察された。

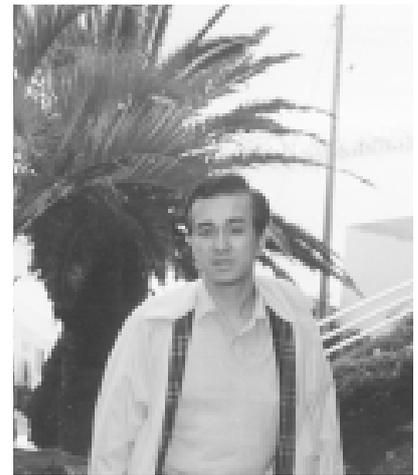
外来で点滴を打ちながら入院の機会をうかがい、2週間が経過して診察に訪れたMさんは、肩を上下させる努力呼吸をしており、動脈の中の酸素濃度は、これ以上悪くなると生命が危ないことを示していた。私は婦長に、緊急入院を促した。

それにしてもMさんの病気はわからないことだらけだった。動脈血データは肺の毛細血管と肺胞との間に炎症があるか、水分が貯留していて酸素が血液の中に溶けていきにくいことを示していたが、レントゲン写真には肺の上の方に淡い影があるだけだった。左心不全からくる肺水腫でも動脈血のデータは説明がつくが、心臓が少し大きくなっていただけ以外は原因となりそうな異常は見当らなかった。

取りあえず、点滴で栄養を補給し、酸素を投与すれば、全身状態が改善するだろう。そうして時間をかせいで、その間に検査を進めればよいとのんきに考えて、フェイスマスクを着けて酸素を流し始めた。動脈血の酸素は改善して、顔に生気が戻ったので、明日までは大丈夫と安心して、指示簿に検査と治療の指示を書き、カルテに当直医にあてて申し送りをしたため、夜遅く帰宅の途についたのだった。

劇的に効いたステロイドホルモン

病棟に戻ると、当直の先生がきつと適切な処置をしてくれたであろうという私の期待は見事に裏切られていた。大学病院からアルバイトで当直に来ているというその若い先生は、何を思ったのか、時々血圧を測る以外はただベッドサイドに突っ立って、チアノーゼが出て意識不明のMさんを看取ろうとしていたのだ。「なぜ何もしないのですか？」と挿管チューブにスタイルットを入れながら、ついなじるように言った。



中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ベルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

すると、「ぼくは先生と考え方が違う」と言って、その先生はどこかへ消えてしまったのである。どこがどう違うというのか？「エンドステージ（末期患者）ではないぞ！今日入院したばかりの新患だ」とつぶやきながら、重症患者を当直医に押しつけて帰宅した後ろめたさも感じていた。

挿管すると、人工呼吸器につないで持続陽圧呼吸を開始した。これは、呼吸の最後に軽い圧をかける方法で、酸素が肺の毛細血管へ溶けていくのを助ける働きをする。こうしてMさんの呼吸は落ちつきチアノーゼが消えて意識も戻り、危篤状態を脱した。しかし、経過を考えると、呼吸不全の原因に対して何か手を打たなければ、じり貧だろう。翌朝になるのを待って、診断はついていないが、ステロイドホルモン（メチルプレドニゾロン）の大量投与に踏み切ることにした。副作用の多い薬だが、炎症とその結果起こってくる組織のむくみを取るのには特効的に効く。肺胞や肺の末梢の細い気管支に炎症があって、浮腫があるとすれば、きっと効くに違いない。

案の定、この作戦は見事的中し、Mさんは見る見るうちに良くなっていった。数日たって、人工呼吸器をはずし、挿管チューブを抜くという時、お願いしてベッドサイドで気管支鏡検査をさせてもらった。酸素を十分に吸ってもらったあとに、すばやく気管支鏡を挿入し、細い気管支を少量の生理食塩水で洗って回収し、大事に冷蔵して検査会社へ送ったのである。

「ウイルスが分離されました」

Mさんは結局、診断がつかないまま、でも一命を取り留めて良かったねということで、ご本人もご家族も喜んで退院していかれた。もやもやした気分のまま、1週間が過ぎた頃、検査の結果が戻ってきて、私は目を見張った。「ウイルスが分離されました。アデノウイルスII型です。」と書かれていたのだ。外来で出したサラサラとした痰からも同じウイルスが検出された。後になって、血清のアデノウイルスII型に対する抗体価が入院前後で上昇していることが証明

されて診断が確定した。

今から思えば、外来で見られた薄い血痰とそ  
 中の沢山の剥脱した線毛上皮細胞が診断の決  
 め手で、もう少しウイルス感染症に詳しい医者  
 だったら、その時点でピンときたのかもしれない。  
 アデノウイルスは口や鼻から侵入し、鼻や  
 喉や気管、気管支、肺の上皮に感染する風邪の  
 ウイルスである。しかし、Mさんのように重篤  
 な風邪に出会ったのは、後にも先にもこの時だ  
 けだった。風邪は万病の素というけれど、昔だ  
 ったら、Mさんのように肺の上皮が広汎にやら  
 れたら、早晚二次感染の細菌性肺炎を起こして  
 命を落としていただろう。外来で処方していた  
 強力な抗生物質の予防的内服がそれを防いでい  
 たに違いない。風邪というと、インフルエンザ  
 ウイルスを思い浮かべるが、実は風邪の原因ウ  
 イルスの中で一番多いのはライノウイルスとい  
 う鼻風邪を起こすウイルスで全体の70%を占める。  
 しかし、残り30%の風邪の症状を起こす原因ウ  
 イルスは表1のように非常に多い。Mさんを殺  
 しそうになったアデノウイルスは頻度は少ないが、  
 時として集団感染を起こすので、60年代にアメ  
 リカでワクチンが開発されたこともあった。

免疫がヒトを殺すこともある

Mさんの病態について考えるとき、その後の  
 臨床や研究面でいろいろと示唆に富むものがあ  
 った。病理標本を採取したわけではないから、  
 あくまで想像の世界なのだが・・・。

肺炎の診断をする時、医者が一番頼りにする

ウイルス	その他の標的器官
インフルエンザウイルス (A, B, C)	
パラインフルエンザウイルス	
RSウイルス	
麻疹ウイルス	脳、細網内皮、リンパ球
ムンプスウイルス	唾液腺、精巣、卵巣、髄膜
ライノウイルス	
コクサッキーウイルス	腸管粘膜、脊髄、筋、皮膚
エコーウイルス	腸管粘膜、脳、脊髄、皮膚
コロナウイルス	
アデノウイルス	結膜
リンパ球性脈絡髄膜炎ウイルス	髄膜

表1: 主な風邪の原因ウイルス

のはレントゲン写真だが、Mさんのようなウ  
 イルス肺炎やカリニ肺炎、マイコプラズマ肺炎など  
 では、レントゲンの影と重症度が一致しないこ  
 とがしばしばある。おそらく、Mさんの肺の細  
 胞はアデノウイルスに広汎にやられていて、毛  
 細血管の周囲に炎症細胞の浸潤があったために  
 肺胞から酸素が血液中へ移動しづらい状態だ  
 ったのだろう。しかし、ウイルスは細胞の中にし  
 か棲めないから、肺胞の中は比較的きれいだ  
 ったに違いない。また、細い気管支もやられてい  
 たとすると、肺胞に入った空気は出て行きにく

くなり、膨張した状態になるだろう。こうして、  
 実際には炎症細胞が沢山浸潤していても、レン  
 トゲン写真上影の少ない過膨張性の肺に見える  
 だろう。

もう一つ、ステロイドホルモンの著効で感じ  
 たのは免疫が人を殺すこともあるということだ。  
 ステロイドホルモンは現在人類がもつ最も強力  
 で有効な免疫抑制剤である。それは、免疫細胞  
 特にリンパ球の細胞死を誘導し、炎症を収束に  
 向かわせるが、同時に病原体にとっては敵が少  
 なくなるわけだから、有利である。事実、ステ

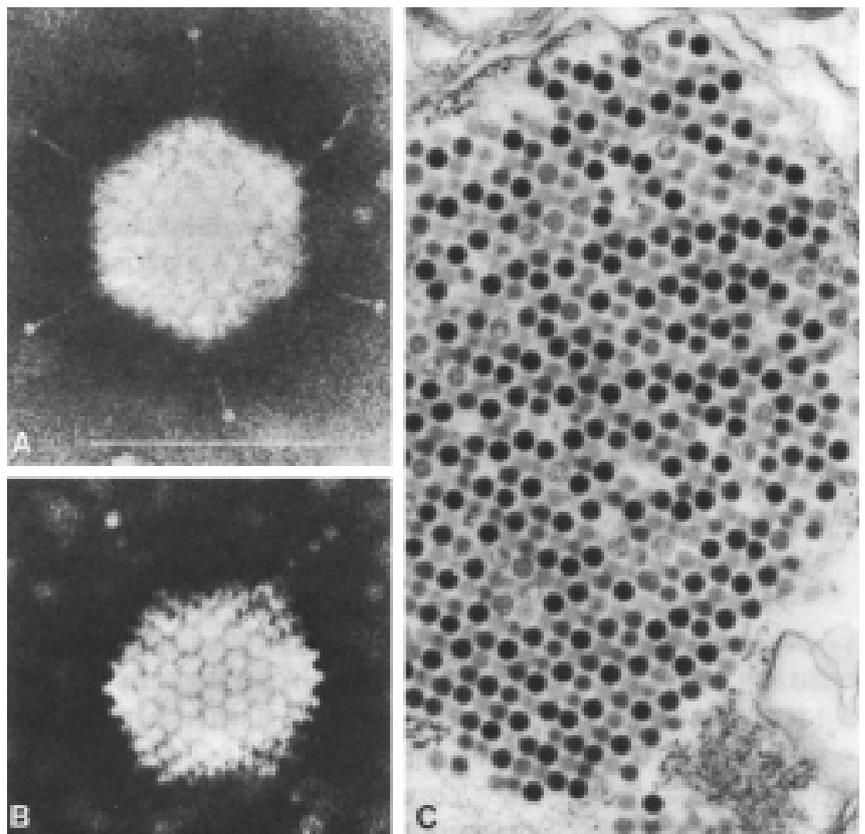


図1:アデノウイルス科。(A, B) 陰性染色標本。(A) ビリオンの各頂点から突出したファイバーを示す。(B) ビリオン表面は、カ  
 プソマーの正十二面体配置を示す。頂点のカプソマー(ペントン)は、近接したカプソマー5個に囲まれる。ペントン以外のカプ  
 ソマー(ヘクソン)は、いずれも近接した6個のカプソマーに囲まれる。(C) ヒト線維芽細胞切片標本、核内封入体中の成熟し  
 たビリオンの結晶状配置を示す。横棒=100nm。[A, Bは、R. C. Valentine and H. G. Periera, J. Mol. Biol., 13, 13  
 (1965)より; CはA. K. Harrison 博士提供]『医学ウイルス学』

ロイドホルモンの長期使用による日和見感染症は臨床医がよく遭遇することである。Mさんはアデノウイルスに感染していたわけだから、それに対抗する免疫細胞を叩いてしまうことは、ちょっと考えると矛盾しているような気もする。もしかしたら、Mさんはアデノウイルスに殺されそうになったのではなく、アデノウイルスに反応して肺に集まってきた自己の免疫細胞に殺されそうになっていたのかもしれない。結核性髄膜炎や激症肝炎でも同じ様な免疫過剰状態が知られている(本誌vol.21「注目されるサリドマイド療法」参照)。

#### アデノウイルスの新局面

最近、アデノウイルスはいろいろな点において注目されている。第一には遺伝病や癌を治療する遺伝子治療において、アデノウイルスのDNAから有害な遺伝子領域を取り除き代わりにヒトの遺伝子を組入れて正常な遺伝子を細胞に送り込むための運び屋(ベクター)として試されていることである。ウイルスが細胞の中の核に入り込むことを利用したのである。1993年に米国保健衛生研究所において囊胞性線維症の遺伝子治療が試みられ注目された。初期の治療研究後、アデノウイルスベクターの毒性が見つかり、現在改良ベクターの開発が行われている。

第二は、アデノウイルスが肺の上皮細胞に潜伏感染し、それが小児喘息や成人の肺気腫の引き金となっているのではないかと考えられていることである。東大第三内科の慶長直人博士らの研究から、アデノウイルスは肺の細胞に感染すると、E1A遺伝子という特定の遺伝子領域を働かせて、細胞に炎症細胞を呼び寄せるケモカインと呼ばれるタンパクを放出させたり、細胞表面の構造を変え、炎症細胞を接着させるようになることがわかった。つまり、アデノウイルスが潜伏感染した肺の細胞は組織に炎症を起こしやすい敏感な細胞になってしまうのである。

第三にアデノウイルスに感染された肺の上皮細胞は、肺炎球菌を表面にくっつきやすくするという報告があり、上皮の破壊、剥奪とともに風邪に続いて起こりやすい細菌性の肺炎のメカニズムを説明している。

#### 風邪症候群の混沌

ふつうの人は平均して年に5~6回は風邪をひくといわれる。風邪は医者が外来で遭遇する最も頻度の高い疾患ではないだろうか?しかし、風邪の診断と治療ほどいい加減に済まされているものはないのである。どの内科の教科書も風邪に関する記載は非常に曖昧で簡単だ。そればかりか、風邪の原因ウイルスをターゲットにした特効薬もほとんどない。風邪を診断するための正確な手順を書いた教科書を見たこともないし、また、実際にウイルスの検査をいちいちしている医者はまずいないだろう。風邪は、細菌感染ではない呼吸器の感染症ということで、多くの場合除外診断としてかたづけられている。

咽を見て首を触って聴診して、「風邪だから暖かくして安静にしてれば心配ないですよ」と患者に言うとき、ふとMさんのことが頭をよぎることがある。

# ヨーロッパで初の 原爆展開催される

テーマは、「広島・長崎、その後の兵器」—反戦争と反兵器—

1997年3月、イタリア中部のペルージア、アッシジ両市で、ヨーロッパで初めての原爆展が開催されました（イタリア実行委員会主催）。写真パネル、被爆資料の展示、原爆記録ビデオ「ヒロシマ・母たちの祈り」の上映、子どもたちが描いた平和ポスターや絵画の展示が主な内容で、1日から31日の1か月間に、両会場で約43,000人の入場がありました。

「イタリアで原爆展示を」実行委員会代表の伊藤春樹・藤女子大学助教授は「展示会はイタリア人も驚くほどの成功裡に終えることができましたが、長い時間をかけて見学する人が多く、涙する人、声を詰まらせる人もいたことは展示会の意味を計るのに良い判断材料であったと思います」と、また会場を訪れた樽井正義・慶応大学教授は「ペルージア会場では第二部というかたちで、サラエボとルワンダの子どもたちの被害が展示されていて、戦争が人間にもたらした過去の途方もない悲惨と、いまでも続く惨状を考えさせる構成になっています」「平日の午前中は生徒たちがクラス単位でやってきて、ボランティアの係員の説明に聞き入っているようです」と報告して下さいました。

あるペルージアの女性は感想ノートに「とても動揺しています。今もなお自分に問いかけています。なぜ？なぜ戦争を？なぜこんな残忍なことが？この非常に重要な展示会の主催者の方々に感謝します。これは深く考えるために、忘れないために、そしてより分別のある人間になるために有意義なものです」と記していました。

この後、同原爆展は、4月15日～6月15日にスペインのバレンシア市で、9月15日～11月15日にドイツ・ハイデルベルグ市のハイデルベルグ城内で予定されています。

世界中の市民が連帯して、21世紀を「平和な世紀」に

（大牟田稔・広島平和文化センター理事長のイタリア「原爆展」開会挨拶より抜粋 1997年3月1日）



広島・長崎両市は1945年8月、世界で初めて原子爆弾による攻撃を受けました。一瞬にして市民は、おとなも子供も、男性も女性も、無差別に、強烈な熱線、すさまじい爆風、そして放射線による汚染をうけ、市街は完全な廃墟になりました。わずか一発の爆弾によって、どれほど多くの人間が殺され、傷つき、長い間苦しんだかを皆さまに少しでも理解していただき、核兵器は未来の人類と決して共存できない兵器であることを、知識とともに感覚でも知っていただきたいと考えます。

原爆が広島に投下された当時、私は14歳でした。広島から約15マイル離れた都市で、青白い閃光を感じ、やがて私の友人も生命を奪われていたのです。原爆が使用されてから52年もの歳月が流れました。しかし、地球上には核兵器が今も大量に蓄積されています。核軍縮そして核兵器廃絶を求める市民の声は世界中で高まっているのに、現実の国際政治では核兵器を力の

象徴として扱い、核兵器保有国は互いに牽制しあって、核兵器廃絶への道を閉ざしているように見えます。

国連の国際司法裁判所は昨年、一般論ではありますが、明確に「核兵器使用は国際法に違反する」という判断を示しました。このように、いま国際的な流れは、核兵器廃絶へ向かって、大きく動こうとしています。このようなときであればこそ、私たちは、たとえ国際政治の動きが鈍くても、私たちひとりひとりの戦争をなくす努力のなかに未来への希望を見いださなければならぬと考えるのです。

間もなく21世紀がやってきます。20世紀は科学技術が飛躍的に発達したものの、「戦争と革命の世紀」でした。次の21世紀は、世界中の市民が連帯して、武力で人間が争うことのない「平和な世紀」にしたいものです。

# 出会い (2)

—向陵(旧制一高)時代—

奥村 一郎

## 失われた青春

旧制中学から大学まで、ほとんど止むことのなかった戦争の時代にかかっていたため、その頃の学校生活は、いうまでもなく、ありあまるほど物の豊かな現代社会の学生生活とはおおよそ異なるものであった。「欲しがりません、勝つまでは」「天に代わって不義を討つ」、聖戦の名の下に、「滅私奉公」のスローガンを盾にして、第二次世界大戦の悲惨な終末まで、戦争から戦争へと駆り立てられてきただけでなく、「空の要塞」といわれたB29の連続爆撃と、恐るべき2つの原子爆弾によって日本全土が廃墟に化せられた敗戦後の生活は、今では想像もつかない混乱と貧困の極みにあった。その十数年間にわたる、わたしの青春といえば、「失われた青春」というしかない。その間に、学生生活らしきものは旧制一高時代のわずか1年8ヶ月だけであった。

## 全寮生活

しかし、そのような波瀾万丈の青春にあって、夕闇に光る金星のようにただ一つ、悲しいまでに美しく、今なお失われることのない思い出は、旧制一高向陵時代の全寮生活であった。というのは、学生生活全体を通じて良き師、良き友と出会う機会がそこで与えられたということである。とくに、どこからも一切介入されることのない、学生の完全な自治による全寮生活。それが与えてくれた、優れた先輩や同輩との日々の交わりは人間の最も根源的な真理への渇きと若き情熱とを沸き立たせてくれた。形としておおよそ粗雑なものであったとしても、そのような寮生活なしには、わたしの一高時代の学生生活は魂のないものになってしまったであろう。

明治33年、後に首相にもなった鳩山一郎の入学に際し、男勝りの母春子夫人が狩野校長に面会し、こまやかに自宅の家庭教育の行き届いていること、それに対し、寮生活の不潔粗暴なことを列挙して、一郎の自宅通学を申し出たとき、狩野校長はじつくりと言いつきをきいたあと、ただ一言、「入寮を望まれないのでしたら、どうぞ転校してください」ときっぱりいわれたという逸話がある。

## 夜の寮歌

わたしが寮にいたときも、約1500人の寮生が分宿している4つ



奥村 一郎 / おくむら・いちろう (前列中央・1943年)

1923年、岐阜県生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

の寮の建物は、どれも、今なお存続するほどの頑丈なものであったが、その中は、常識では考えられないほど汚く乱雑極まるものであった。その程度や生活習慣は時の経過とともにいくぶん変わってきたであろうが、夜中に寮歌を怒鳴りながら廊下を練り歩き、寝ているものを叩き起こしては、1時間も2時間も説教したり議論したりするストームは日常茶飯のこと。「寮歌いこう!」と誰かが叫ぶと、一斉に「オーッ!」と応え、天井も破れるような大声で夜遅くまで歌いつづける。それに呼応して、幾つかの他の部屋も負けじとばかり歌いはじめる。別のところからは、「うるさい! やめろ!」と、窓を開けて叫ぶ。しかし、それもコーラスの中に織り込まれてしまい、青春の熱気は夜空に燃え上がる。

## 落書き

寮の壁といえば、落書きでいっぱい、毎年全部塗り直す費用は莫大であったという。寮生はもちろんそんなことには無頓着、新たになった壁にまた新たな落書きを始める。それも、習いたてのドイツ語やフランス語、下手なギリシャ語など、また、哲学や文学の名文句を縦やら横、斜めに無茶苦茶に書きなぐる。ときに、落書き論戦も華やか。これも、ひとつの自由教育の素材となっていたのかも知れない。しかし、そのままこれが、トイレの壁までひろがっていたのには、初めて見たとき驚いた。もちろん下品なもの一つもない。高尚な詩や歌、なかなか為になる人生訓、ときに、カウンセリングもどきの勧告まである。それを丁寧にノートにメモして、いわく『黄金文学』を作るのだと意欲に燃えた寮生もいた。これと似たことは、思い出すときりが無い。

無茶というか、粗暴というか、そうした寮生活は、とにもかくにも、鳩山春子ご夫人の教育理念の粋にはとうてい入りようがなかったにちがいない。

## 教室風景 いでき 夷狄の学

当時も、一高には名物教授といわれる先生がおられた。少し前

には哲学を教えておられた岩元禎教授やドイツ語の菅虎雄教授などが知られていた。わたしたちの頃には、阿藤伯海という、これまた奇抜な漢文の先生がおられた。いつも羽織袴という姿で授業をされた。教室というところは聖なる場所であるから、背広などという野蛮な西洋の服をきて教えるとはけしからん、冒瀆の罪である、という主張であった。

ある日、その授業の前に、わたしは慌てて次のドイツ語の宿題を夢中でやっていた。阿藤先生が入ってこられ、扉近くの席にいたわたしをチラッと睨むようにして通り過ぎ、黙って教壇に上がった。と、開口一番、「今ここで、聖賢の学を始めようとするときに、夷狄いてきの学をしている馬鹿ものがある！」と叱りとばされた。どっと皆が大声で笑い、わたしはすぐドイツ語の本を閉じた。

しかし、わたしたちがドイツ語専攻の学生であることは、先生は百も承知のはず。それを、夷狄、すなわち野蛮人の学と言い切る先生の漢学者としての堂々たる主張に、叱られたわたし自身感動。すでに50年にもなる今だにそのときの光景が思い出されてくる。西欧文化一辺倒の頃であったから、漢学者の先生には苦々しく思う競争心も少しはあったかも知れないが、あそこまで言い切ってしまうされると、さわやかなユーモアさえ感じられた。また、そのような時代に迎合することなく、自身の生き方に徹しようとする確固たる信念には知識人という以上に、求道者の情熱が感じられた。その時は、いつもの羽織袴姿がいつそう光って見えた。このような学道に命をかける人格者は今どこに見出されるのだろうか。

#### 昨日から明日への問い

急速にアメリカナイズされた戦後社会の学校教育では、才能教育は進んだものの、根源的人間教育は貧しくなった。とくに、精神教育において。学校秀才を育てるだけの知育教育だけでは、人間は人形になってしまうか、あるいは、落ちこぼれになってしまう。そこでは、人間が本当の人間(真人)にはなれない。戦後の学校教育としてとくに唱道されてきた、知育、徳育、体育の三つの調和がとれた「全人教育」にしても、個性の乏しい既製品の人間を作ってしまう盲点があったことは否めない。過去は現代を問い、現代は明日に責任をもたねばならない。

明治より100年近い伝統をもつ一高の寮舎は、まもなく、永遠にその姿を消そうとしている。中川宋瀏老師とともに、坐禪に精進した「三昧堂さんまいどう」もなくなるであろう。奇異な入寮式で知られていた「嚶鳴堂おうめいどう」は、すでに、戦時中の爆撃で消失した。人も家も、すべて形あるものは過ぎ去っていく。しかし、過ぎ去っていくことは無くなっていくのではない。新しいものを生み出していく力に変わらねばならぬ。あたかも、食べ物の形が消えて体を養う新しい血となり肉となるように。創造は伝統に根ざすことなくしてはありえない。創造力なき伝統はもはや屍でしかない。明日をつくるものは、両者をひとつにする「創造的伝統」である(\*\*)。

\*阿藤伯海(1894~1965)

阿藤先生が一高において教鞭をとられたのは、昭和16年から19年の短い期間であったが、古武士と学者をあわせたような風貌と世俗に染まぬ生き方は多くの学生に感化を与えた。その紹介には、清岡卓行『詩礼伝家しれいでんか』(講談社文芸文庫 1993)の好著がある。

\*\*古人の跡を求めず。古人の求めしものを求めよ。

# LEWIS HINE

The Work of Lewis Hine  
1997. 7. 3 (Thu.) — 8. 29 (Fri.)



夏季休館  
8月9日(土) — 8月17日(日)

ルイス・ハインは、アメリカがめざましい工業化を遂げた20世紀初頭に、社会的な観点から人々をとらえた写真家です。

# 偉大なブルゴーニュワインの ぶどう品種は

横山 弘和



シャルドネ

昨年は、晩秋の11月にブルゴーニュを訪れました。畑ではぶどうの収穫も終わり、葉もすっかり落ちて、樹は裸にされたような、寒々しくて、何か可哀相な風景しか見ることができませんでした。ブルゴーニュを旅する楽しみの中に、その美しい風景は欠かせません。

ディジョンから南のサントーネまで、ルート・デュ・ヴァン（ワイン街道）と呼ばれる道があります。その街道沿いに、よく手入れされたぶどうの樹が立ち並ぶゆるやかな傾斜地が、この県の名前にもなっているコート・ドール（黄金の丘）なのです。この名の由来は、ぶどうの葉が見事に紅葉する秋、太陽の光を浴びて燃えるように、まさに黄金をちりばめたような光景からきたものといわれています。また、この名の由来には、もうひとつ別の説があります。それは、この丘陵に産するシャンベルタン、クロ・ド・ヴージュ、ロマネ・コンティ、コルトン、モンラシェなど高価な銘酒の数々がもたらす富からきたものだとする説です。どちらにしても納得がいく話です。

さて、優れたワインを作り出すために重要な要素が3つあるといわれています。それは、ぶどうの品種、土壌、気候です。通常、ワイン用のぶどうは、食用のぶどうと違って、だいたい小粒で果皮が厚く、種が大きく、粒が不揃いで見ばえも悪いので食用には適しません。しかしその果汁を発酵させると、素晴らしいアルコール飲料が作れるのです。フランスのワイン産地では、法律で定められた、その土地や気候に適した伝統的な品種のぶどうを栽培しています。それが産地別のワインの味の違いとなるのです。また、産地によって1種類のぶどうだけを使う場合と、2種類、3種類と複数のぶどうをブレンドする場合があります。なかにはローヌ地方のシャトーヌフ・デュ・パブのように13種類もの品種が栽培され、使われている産地もあります。その点、ブルゴーニュはわかりやすく、白も赤もだいたい単品で作られます。

それでは、ブルゴーニュワインの主要な品種の説明に入ります。白ワイン用にはシャルドネとアリゴテ、赤ワイン用としてはピノ・ノワールとガメの4種類です。

## シャルドネ

北はシャブリから南はマコンまで、ブルゴーニュ各地で生産され

る最上の白ワインを作りだしているのは、すべてこのぶどうです。またこの品種は、発泡酒で有名なシャンパーニュ地方で、赤のピノ・ノワールとともに栽培されている古典的なぶどうでもあります。南部のマコネ地区に同名の村があり、このぶどうの名前の由来といわれていますが、確かではありません。しかしシャルドネは、疑いなく辛口の白ワイン用の品種としては最高のものです。

このぶどうは石灰質の土壌を好み、比較的栽培しやすいこともあり、近年はイタリアやスペインでも高級ワイン用として積極的に栽培され、アメリカ、オーストラリア、チリなどのワイン生産地にも移植されて成功しています。ちょうど、世界のワイン消費傾向が、量より質、より辛口好みへと変化し、甘口ワインの人气が落ちてきた1970年代から、トレンド的な飲み物として広く飲まれはじめました。

シャルドネの良さは、若いうちはアロマが新鮮でさわやかな涼味があり、グラス1杯を食前酒や清涼飲料として気軽に楽しめます。そして、いろいろな魚介料理とあわせやすいワインでもあります。またこの品種は瓶の中で熟成し、色も、薄い麦わら色から豊かな黄金色に変色します。複雑なブーケが快く、飲み込んだ後も豊かな余韻が長く続くワインとなります。とくに、特級、一級格付け畑の良年のものは長命で、5年、10年と向上が期待できます。そのようなワインは特別の折りに開け、じっくりと味わいたいものです。

## アリゴテ

このぶどうからは高級ワインは作られず、平凡な日常ワインとなります。シャルドネと比べるとやや酸味が強く、瓶内での熟成、向上は期待できません。普通、他のぶどうより不利な斜面で栽培でき、果実の成熟は早く、収穫量が多いので、取り入れを早く済ませることが出来ます。日照の良い年は、清潔でさわやかな飲み口の、食欲をそそるワインが作られます。南のコート・シャロネーズ地区のブーズロン村のアリゴテは特別の評価を得ています。ブルゴーニュ名物の食前酒「キール」はディジョン産のクレーム・ド・カシス(すぐり果汁)をこのワインで割るのが伝統的な作り方です。なお、このワインを買うときは、できるだけ若いヴィンテージ(収穫年)を選ぶのがよいでしょう。

## ピノ・ノワール

ピノ・ノワールは世界の赤ワイン用ぶどうのうちでも、高貴種といえる優れたぶどうです。そしてコート・ドールで生産される赤ワインは、全てこのぶどうから作られます。果皮は青みがかった黒色で厚く、果肉は無色ですが発酵時に皮も破碎して漬け込むので、赤い色になります。カルシュウムを含んだブルゴーニュの土壌が、このぶどうの栽培に適していて、他のワイン産地では真似のできない、最高の赤ワインができるのです。ヨーロッパでは、ドイツ、スイスでも栽培されていますが、色も薄く、味も軽いものになっています。同時にアメリカ、オーストラリアなどにも移植され、ワインが生産されていますが、シャルドネほどの成功は、まだ見られません。しかし近年アメリカのオレゴン州でかなり良質のワインが作られ、期待されています。

## ガメ

本来コート・ドール独自の品種で、サン・トールバン村にあるガメという小さな集落が、その名前の由来とされています。収穫量が多いことから、19世紀まではコート・ドール全体に広く栽培されていました。しかし、このワインは酸味が強く、タンニンが乏しく、こくがない軽いワインで、長持ちもしません。そこでだんだんと、収穫量が少なくてもより高い品質が望まれて、しかも長持ちするピノ・ノワールにとって代わられてしまいました。そしてガメは南のボジョレー地区全体とマコネ地区の一部だけで栽培されるようになり、そのほとんどがリヨン市で消費されていました。

ところが第二次大戦後、にわかにパリのカフェなどで人気が出始め、加えて、軽く新鮮で、早飲みを楽しむヌーヴォーとして世界的なブームとなりました。しかし、このヌーヴォー騒ぎも生産者の欲張りから過剰生産になり、品質が落ちると同時に飽きられたこともあって、最近ボジョレーの値段は買い叩かれて暴落しています。生産者にとって死活問題にまで発展しています。

以上、4つのぶどう品種はブレンドされず単品でワインが作られます。しかし、ひとつ例外があります。ブルゴーニュ・パス・トゥ・グランと、ラベルに表示されているワインはピノ・ノワール3分の1、ガメ3分の2で作られます。このワインは高価でもなく、珍重もされません。

(横山弘和 / よこやま・ひろかず ヴィタリテ事業部、元ホテルオークラ ソムリエ)



ダライ・ラマ師、シャトー・ドゥ・シャイイに2泊

1998年3月、シトー修道院は900周年を迎えます。それに先立つ会合のため、チベットのダライ・ラマ師がディション近郊にあるシトーを訪問されました。シトーは現在、トラピスト派修道会の総本山になっています。シャイイに逗留された師は、弊社社長とともにヒマラヤ杉を記念植樹して下さいました。

(1997年4月17～20日)



Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ

お問い合わせ  
(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当:岩沢  
Tel. 03 3582 5087